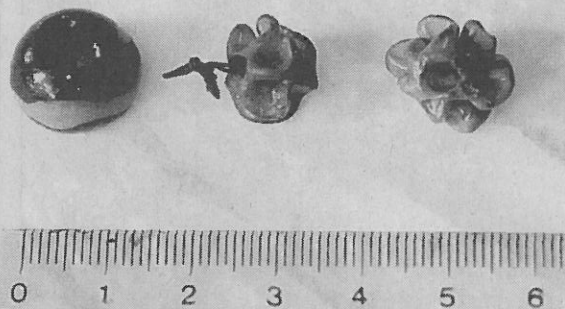


正倉院宝物と同一材質

京都府宇治市の平等院は24日、本尊・阿弥陀如来坐像(国宝)の台座下から04年に見つかったガラス玉について、一部が正倉院(奈良市)宝物のものと同一材質だったと発表した。宝物は藤原不比等の娘・光明皇后や聖武天皇の遺品などで、同一の官営工房で作られた可能性が高いとみられる。調査に携わった東海大大学院の井上曉子講師(ガラス工芸史)

宇治・平等院本尊のガラス玉 藤原家「家宝」で装飾か

は「藤原家に伝わり代々受け継がれたガラス玉を、(1053年に平等院鳳凰堂を建造した)藤原頼通が装飾に使った可能性がある」と推測する。台座下から見つかった244個のうち調査可能な186個を、井上講師と東京理科大の中井泉教授(分析化学)が蛍光エックス線などで分析。19個が奈良時代、残りが平安時代の製造と判明した。



本尊台座下から見つかり、正倉院宝物と酷似していたガラス玉―京都府宇治市の平等院で24日

さらに19個のうち、花びらに似た形状の2個(直径13ミリの厚さ10ミリ、直径16ミリの厚さ13ミリ)と、黒に灰色のしま模様がある球体(直径16ミリの計3個は、カリウムや鉛の含有比率が正倉院宝物とほぼ一致した)。ガラス玉は本尊の上部につり下げられた天蓋や台座の装飾に使われたと推測される。ガラス玉は、25日から境内のミュージアム鳳翔館で常設展示される。【山田尚弘、写真も】